

「からし種ほどの愛ある信仰を」

(ルカによる福音書 17:5-10)

主イエスは大きくなることよりも、小さくあることを大事にし、小さな命の営みを慈しまれました。今日の福音書で、使徒たちは「わたしたちの信仰を増してください」と、自分たちの信仰が「大きくなる」ことを求めています。しかし主イエスは、信仰はからし種ほどで十分、その中身が大事だと言われます。

大事なことは、「愛」があるかどうかです。パウロは、コリントの信徒への手紙 I 13:2 で「たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。」と言っています。いくら「大きな」信仰を持っていても、そこに愛がなければ意味がない。愛ある真の信仰ならば、からし種ほどの小ささでも十分だ、と主イエスは使徒たちに伝えたのです。

今日の福音の後半部分では、主人に仕えることは当然のことであり、見返りを求めず、しなければならないことをすることが、クリスチャンには求められていることが記されています。しかし、ルカによる福音書 12:37 には全く逆の記述があります。「はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」この矛盾したような記述が何故あるかと考えると、やはりクリスチャンの働きとは、主人である神からの愛への応答なのだ、ということです。まず、神がわたしたちを迎え、もてなし、給仕してくださる。そのことに深く感じるからこそ、わたしたちは感謝し、神に仕えて生きる心が与えられます。その愛が究極的に示された出来事こそ、十字架の死と復活です。主イエス自らが十字架上でもっとも小さくなり、命をささげてくださいました。そのたった一つの命を神は復活させた。ここに、たった一つの命へ注がれる神の大きな愛が示されました。そして、そこに示された大きな愛を知ることこそ、わたしたちの内にも小さな命を慈しむ心が与えられます。愛ある信仰とは、主イエスを通して示された神の大きな愛をいただくからこそ、わたしたちに宿るのです。

たった一つの命がすべての命の救いの源となった出来事こそ、からし種一つの信仰、愛ある信仰があれば、そこに神からの大きな力が注がれることを証ししています。大きなものに気を奪われ、小さなものへの眼差しを失うことがないように。からし種ほどで十分。神の愛の欠片をいただき、神と人ともに仕えて生きていくことができますように。